

人間関係科における授業『人間論』の可能性

大 森 正 樹 (南山短期大学教授)

1) これまで人間関係科において、『人間論研究』、『人間性の探究』、『人間論』などと名称を変更しながらも、まがりなりにも「人間論」に関する授業を行ってきた。それが果たしてその名称と受講生に相応しいものであったかどうか、にわかには決しがたいところもあるが、そういうことも念頭において、どんなことをやり、また、将来どんな可能性があるかをめぐる少し考えてみたい。まずどんなことをしたか、授業のテーマを振りかえってみる。

1979—1997年度の授業テーマ一覧

1979年度。この年は筆者が短大での初年度ということもあって、単独での授業はもたず、大庭先生とともに、ブーバーの『我と汝』を読む、『対話的人間』という授業を行った。

1980年度。『人間論研究』と称して、トマス・アクイナスの『神学大全』の一部分読む。

1981年度。前年度と同一テーマ。

1982年度。テーマは愛について。J. ピーパーの『愛について』を読む。

1983年度。前年度と同一テーマ。

1984年度～1985年度は筆者がローマでの在外研究に従事したため、休講。

1986年度。「アイコン」をともに学ぶ。

1987年度。休講（他の各論を担当したため）。

1988年度。国際化社会の中での日本人のあり方をめぐって考える。

1989年度。前年度と同一テーマ。

1990年度。哲学・文学の視点から人間を探る試み。

1991年度。身体について哲学的に考察する。

1992年度。ドストエフスキイや宮沢賢治の作品を通して、神と人間、世界と人間
の関係を探る。

1993年度。再び『対話的人間』を担当。

1994年度。『対話的人間』続講。

1995年度。ドストエフスキイの『白痴』を素材にして人間のあり様を探究。

1996年度。科目名称を『人間性の探究』と変更して、英語で、プラトン、デカルト、パスカルなどの著作を抜粋して読む。

1997年度。従来からある各論『人間論』に合流して、教員二人で担当する。

以上を概観してみると、当然のことながら、教師の関心が軸となって授業の内容が組み立てられていることがわかる。しかしブーバーの場合は、彼の思想を読み解くことは、人間関係科の哲学を理解するという意図で授業が行われていたため、言ってみれば、これは人間関係科の理念を学ぶ中核的なものであった。それゆえブーバーについては、それだけで別に論じる必要があるだろう。さし当りは人間関係科においてのブーバーについて、『人間関係トレーニング』所収の「対話的人間」（市瀬英昭、pp.136-138）を参照されたい。

ところで、ブーバーを素材にするのとは別の授業を担当するようになると、当時の筆者の関心が西洋の中世哲学にあったため、それとの関連で授業が行なわれた。その時は、基本的な哲学的思考の基礎を提供することと、日常生活の関心事を離れて、もう少し、自分の精神の奥底を見るような領域に気づいてもらいたいと思い、「神の存在」という短大生にとっては、異質と思われる問題をぶつけてみた。学生にとっては相当苦しい、つまり、通常の生活ではあまり問題にしないことながらに取り組まなければならなくなって、苦勞したようである。ただそこでも、常に人間関係と結びつけて考えていくことを学生には勧めるようにした。

1981年度は、前年と同じトマス・アクイナスのテキストを使いながらも、人間関係科での哲学の位置はどういうところにあるかを探ることをまず行い、トマス以外にアウグスティヌスの『魂の大きさについて』も読むことにした。そして同時に、読むだけではなく、学生一人一人が、授業から示唆されて得た関心を基にして、個人研究を行うことにした。学生が選んだテーマは次のようなものである。「自由、自殺、運命、労働、人格、インド思想における靈魂、魂はいつ肉体と結合するか、老荘思想における哲学者の哲学観、幸福、人生の意味、苦悩、愛、精神と肉体」等々。トマスやアウグスティヌスから老荘思想が出てくることには、驚かされるが、実に、学生の関心は様々であって、自分の関心に忠実に問題を選んでいったようである。そうした研究を進める上での素材としては、フランクフル、カント、老子、荘子、シモーヌ・ヴェイユ、ニーグレン、プラトン、トルストイ、J. ピーパーなどを挙げ、それらに関係した入門書や文献を用いるよう勧めた。

1982年度は、当然のこととは言え、学生の関心が純粋に哲学的なところにあるわけではないということを知り、直接学生に興味があり、なおかつ哲学的にも思索できるような題材を求めているようにした。その結果、やはり年齢的にも「愛」に関心があることから、J. ピーパーの『愛について』を選んでみた。この本にしても、ピーパーの思索の土台になっているトマス哲学だけではなく、古代からの西洋哲学全体のある程度の知識は必要なので、それを説明することになるが、それもなかなか学生には難しいことであった。学生は一人一人担当の部分を読んできて、それを説明するというゼミ形式をとり、後半は自由研究とした。また前期の終わりには個人面接をして、色々な疑問や、その時考えていることを話し合い、夏休みの間に研究に必要な文献を選んでおくよう提案した。学生は後期自分の選んだ文献を中心に、恋愛や結婚、性、等の問題について発表した。

次年度はほぼ前年度と同じ形式をとって授業を進めた。この時は、今道友信『愛』（ブリタニカ）を参照している。個人研究においては、学生たちはアシジのフランシスコの生き方や、E. フロム『愛するということ』、井上洋治『愛をみつける』、渡辺和子『信じる愛をもっていますか』などを参考にしていた。宗教的な愛や、愛は関係であること、自己を与えるということ、無償の愛、愛は生きる力である、等々のことについて、学生はそれなりの理解をもって、発表した。

1986年度は、筆者が海外研究より帰ってきた年である。筆者が関心をもち、またローマにおいて学んできたイコンについて授業を行った。ここではイコンの基盤になっている東方キリスト教の考え方を学ぶ一方、スライドなどを使ってイコンを見たり、西洋の宗教絵画を見て、比較することによってキリスト教を絵画を通して学ぶということにも目を向けた。ここでも学生は自由研究をしたが、それらは、「サン・フランチェスコ聖堂」、「イコンの中のキリスト教芸術」、「ドストエフスキイのカラマーゾフの兄弟を読む」、「イコノスタスについて」、「修道士の生活について」、「東方教会について」、「降誕のイコンを描く」等であった。イコンや東方教会そのものを対象にした学生もいたし、またその他宗教絵画を選んだ学生もいた。

1988年度はこれまで、哲学や宗教といった観点から主に人間にアプローチしていたのを、現代社会の問題をからめながらそういうことが出来ないかを模索し始めた年である。そこでこの頃は日本人論が盛んでもあったので、「国際化社会の中での日本人のあり方をめぐって」をテーマとした。使用した資料は、漫画『フジ三太郎』、学生の提出した新聞記事、ビデオなどで、森有正の『いかに生きるか』の輪読を中心にしながら、以上の資料も適宜討論の対象にした。夏休みには学生は、『タテ社会の人間関係』、『日本人の言語表現』、『「日本らしさ」の再発見』、『ことばと文化』を読んできて、それぞれグループに分かれて後期にレポートすることにした。後期はレポートの発表とともに、木村

敏『人と人との間』を読む。そして残りの時間は、この授業を受けて、再度考え直してみたいことを各自まとめることにした。学生のこの授業への興味としては、外国（米国、欧州）へ行ったために日本人とは何かを考えてみたくなったり、人間とは何かを知りたい、日本人にかぎらず、色々な人の考えを知りたいというものであった。

1989年度はほぼ前年度にならって授業を行ったが、資料としてはニューズウィークなどを加えた。学生の感想としては、普段は外国で起きた事件など、まったくひと事としてしか見ていないが、授業を通して少しづつ自分の立場を通して自分なりに考えるようになった。森有正などの言っていることを理解するのがむづかしい、であった。

1990年度は、文学から人間のあり様を探っていこうとして、まずギリシア悲劇（ソポクレスの『オイディプス王』）を取り上げた。ギリシア悲劇についての基礎的な知識を説明して、ともに悲劇を読み、その後で、「オイディプスはどうな人物か、オイディプスをめぐる人々はどうな人たちか、オイディプスは何をわれわれに語るか」などを討論した。後期はブーバーを一部分読み、後は学生の自由研究とした。学生が取り上げたものは、『こころ』、『風とともに去りぬ』、『走れメロス』、『舞姫』、『塩狩峠』であった。それらについてどういうところに興味をもったか、自分の生き方とどう関係しているか、その作品に現れている人間の根本的問題は何かについてレポートした。

1991年度は、身体・生・死をテーマにした。まず古代ギリシア人の生と死の思想を見、日本人の死生観やデスエデュケーション、脳死、臓器移植、告知、ホスピスなどを扱った。資料はビデオや新聞であった。

1992年度は、ドストエフスキイの『罪と罰』、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』を読み、そこに見られる登場人物の様々な生き方を軸にして、人生を眺めてみることにした。

1995年度は、またドストエフスキイの『白痴』を読んだ。学生の感想は種々様々であったが、ドストエフスキイは言っていることが難しい、というものや無条件に美しい人間として描かれたマイシュキン公爵は理解しにくい人物だ、あまり純粹すぎても人間は生きていけない、一人一人の人物が個性的に、生き生きと描かれている、他人というものはわけのわからないものだが、そういうわけのわからない言動をするのも魅力の一つ、白痴という病気をもっていて、常に死が普通の人よりも意識されて生きているので、人の痛みが人一倍わかってしまう、だから人を傷つけられないのだ、ナスターシャとロゴージンと公爵の最後が悲しかった、授業のやり方では先生と担当した学生とのやりとりということが多かったように思う、というものであった。

1996年度は、これまでと趣を変え、読むものは哲学のテキスト（プラトン、『パイドーン』とデカルト、『省察』、パスカル、『パンセ』）であるが、英語のものを使用した。これはだんだんと四年制大学志望者が増えてきたので、編入

後、演習などで外国語を使うとき、とまどわないようにという親心からであった。ただ英語を読むということに集中して、内容を吟味するということまではいかなかった（学生からもそういう指摘が出た）。それが残念なことではある。

1997年度前期は、前年担当者（『人間論』）の後を引き継ぐ形であったので、もう一人の担当者との協議で授業は進めた。主に学生が人間について日頃から問題だと思っていることを出し合って、一つのテーマを決め、それを調べてから、発表するという形式をとった。

2) 以上がこれまでの授業内容の概観である。

この種の授業は、学生が自らを素材としながら、人間について考えていくものである。人間関係科の授業はその大部分を体験学習という方式で行う。その利点は、自分を素材として、他者を含めて、人間関係のあり様を実体験できることにある。それは自分の体験として非常に貴重なものであるし、そこで学べたことは、他から教えられた、あるいは、憶えなくてはいけないから、憶えたというような、強制的なものではないだけ、いっそう自覚的に自分のうちに蓄積していく。そしてその実習や体験の後には、必ず、ふりかえりが行われて、今、やったことは何であったのかが、内省されるようになっている。自分が感じ、また人について感じたことの意味はどういうことであったか、それが理解できるようになっている。さらに自分の感じや考え方だけではなく、分かち合うことによって、自分以外の人の考えや感じを知ることは、目指すものが単に自分の感じや考えの領域だけにとどまらないことを示している。しかし、ここから先が「人間論」の場合問題である。自分の生活を内省し、他人の考えや感じを聞き、そこから人間存在の持つ諸問題を抽出するのはかなりむづかしいことである。実体験とそれの一般化との間はどうしても離れている。そこで教師としては、既にそうした問題をえぐり出している先人のサンプルを提示することになる。しかしそれは常に学生にぴったりとくるものとは限らない。学生自身の関心のあり様や、適切なテキストが選ばれているか、教師の説明はポイントを押さえたものであるか、テキストの描かれた時代と今はどれくらい離れているか、等々の理由による。

ところでそうしたテキストを読むこと自体がまた問題である。外国語を使うということは置いておくとしても、日本人の書いたものであれ、翻訳であれ、中身を読みとるということには訓練が必要である。大学受験などでそうしたことは既に訓練されていると思っていると、どうもそれは違うようである。従って授業はまずテキストの読みというところから入っていくので、それに時間がとられてしまい、中身の検討がどうしても薄くなる。また学生の中には、少し読んで難しいと思うと、それ以上先に進むことをあきらめるものも出てくる。その状況ではどうしても教師と当たった学生の間のやりとりに終始して、既に

見たように、一部の者だけがその授業をしているという印象を学生がもってしまうのである。

中身についての検討でも、大人数だとなかなか細かい話し合いがなされない。これをグループに分けてやってみても、教師ははじめから終わりまで一つのグループについておけないから、細かい指導が困難になる。小人数の授業だとそれが解消されて、共に考えるという形に近づいてくる。テキストの中身のことがばかりではなく、それ以外のことも話すことによって、学生の考え方や感じ方もわかるようになる。大人数の場合、学生に話をまかせていると、わりとお手軽に差し障りのない話で終わってしまうことがある。そこを、今のテキストからどんな問題が引き出されてくるかを、教師は慎重に学生に示唆する必要があるだろう。

3) しかしわれわれは人間関係科の人間論を通して何を学ぶのだろうか。

まず考えられることは、非常に原理的なことだが、「人間とは何者か」ということの探究である。そこではすぐに役に立つということは度外視して、人間の人間たるゆえんは何なのかを探ろうとする。そのために人間とは何かを真剣に考えた人達の残した文章を頼りとする。そこで考察されたことは、直ちに日常の自分と重ならないかもしれないが、その指し示すところをうかがってみれば、自分のあり様と、類似する面も見えてくる。おそらくこのような思索は、直接の行動を呼び起こすものではないかも知れない。しかし知れば行為せざるをえなくなるようなものだと、ソクラテスの言い方である¹¹¹。しかしその行為はいつも直ちにということであるかどうか。長い沈潜の時期を経たあとの行為もありえようからである。

人間とは何であるか。奇妙なことに、それを知るのは至難の業でもある。おそらくそれを知るためにも行為は必要となってくるのだろう。つまり人間は一人で生きていくのではない以上、否応なく人と人との関係の中で生きざるをえないから、まずは人間関係のあり様を知ること・体験することによって、人間を逆照射する道も開けてくるのだろう。そのときわれわれは人間のもつ多様な側面にも目を凝らす必要がある。人間の行く末に絶望的になることなく、人間のもつ負の側面にも目を注がなくてはならない。それは決して快い仕事ではないが、学生が人に、大人に成っていくためにも、是非必要なことである。徒に悲観的になることはないけれども、そうした負の側面からも人間の輝きを見ることができれば、その人は成長したと言えることだろう。それは人間関係の内面化をはかることでもある。表面的なおつきあいではなく、互いを深く知り合うためにも、人間のもっている重層的な姿を理解することは、何よりも自己理解に必要であり、それが対人関係においても、力をもつからである。

人間関係において最も重要なテーマは、自己と他者との関係ということであろう。放置しておけば、すぐにでもエゴイスティックな行動をとりがちで、こ

の「自己」にとって、他者はうれしい存在であると同時にどこかしらうるさく、わずらわしい存在でもある。ついつい己れを基準にして何事も考えてしまいがちだからである。だからこそ古来から宗教は、自己が抱える問題から脱却するために、己れ（エゴ）からの離脱をはかることを、手を代え品を代えて、人々に説いてきた。そして未だにそれが説かれている。ということは、この問題がとてつもなく人間にとって大きく、困難な問題だということである。人は一人では生きていけないにしても、他者に出会えば、直ちにそこに問題が生じる。それは最低人数の二人が集えば、必ず何か二人の間に生じるのである。友人、恋人、夫婦、親子という比較的小さな集団から始まって、地域、職場、市町村、国、国家間というふうに広がっていても、やはり根は同じような問題である。自己と他者をともに生かす関係、言うはやすく、行うに難いこの問題を、人間論ではどのように取り扱えばよいか、重大な問題である。レヴィナスの言うような、他者の方に巨大な重点を置くやり方は、個人間、国家間を問わず、問題の解決に向かえそうな気もするが、しかし、大多数の人間はその重い意識に耐えられない。このような問題意識は、日本では宮沢賢治が非常に透明な仕方でも語ったのかもしれない。世界ぜんたいが幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ないという言葉は、現実判断を優先して考えれば、不可能事を語っている。つまり人間は、己れが無になってしまいそうな事態を注視できないからである。関係存在である人間がともに生きてゆける場とは、一体どこなのであろうか。

ドストエフスキイの研究で有名なバフチンは面白いことを言っている。ドストエフスキイの作品はまったく異なった種類の人間の共存と相互作用の場である⁽⁴⁾、というものである。しかし彼の作品の中に登場する人物はみんながいつもともにいて、仲良くしているわけではない。愛もあるが、憎しみも十二分にあるし、殺人も、自殺もふんだんにある。これがどうして共存の場なのであろうか。共存（сосуществование）というのは、少なくともバフチンの独特の言い回しかも知れない。われわれが通常考えているような意味での、共存ではないのかもしれない。しかし互いに反目しあったり、喧嘩しあったりしている者同士が、そういう仕方でも共存していると言われうるならば、それがどういう事態なのかを、一度は、真剣に考えてみる必要があるだろう。確かにそれは「一緒にいる」ということだけではないからである。人を殺してしまうことは、自己の欲望を力づくで人に押しつけることであろうが、それに至らない、自己の考えや感情のぶつけ合いの状態であっても、共存という事態は現出しているのかもしれないからである。

しかしまた「自己」は、それだけで侵すことのできないものである。確かに醜いエゴをさらけ出すこともあるが、その「ところ」は何人もこれを意のままにはしえない。つまりここには、尊厳をもつ「ところ」なる自己と、エゴにも頹落しうる「自己」の葛藤がある。エゴとところのせめぎ合いがある⁽⁵⁾。崇高な

自己は、己を何とかして超脱しようとして、いろいろの訓練や試みをする。しかし自己にのみかかずらわる自己の鍛錬は、他者を見失っているかぎり、オーム真理教の惨劇を生む。他者性という視点の欠けた自己成長や自己訓練は本来ありえないことなのである。

また人間の孤独についても、考察する必要が出てくる。一人では生きていけない人間であるにもかかわらず、人は一人になることがあり、人から見放されたかのような気持ちになることがある。そうした孤独の意味を今一度考え、そこから個としての人間のあり方へと、考察を進めてみるのも興味深いことである。他方、この孤はまた、一般的に、人間にとり異性の出現によって、一つ次元の異なる状況にも投げ入れられる。孤である各々の人間が、異性を意識して関係を結ぶとき、エロスの存在としての人間は孤の克服と、またその反対に極端な孤の極みにまで落ち込むことがある。他者性の認識をどの程度もちあわせているかのよって、エロスは昇華されもすれば、頹落していくこともある。このエロスの存在としての人間のあり方も、「人間論」の非常に大切な領域である。

そしてまた将来的には地球規模での大きな不安や、心配の多い現状ではあるが、これまで人類が辿ってきた足跡を眺めてみると、これからの人類はどのような方向に進み、そしてどのような人間になっていくかを、考えることもこの授業でなすべきことではあろう。明るい未来が描けるかどうか、はなはだこころもとないことであるが、人類の叡知をもってすれば、決して、悲観的結末にのみたどり着くというものでもあるまい。そのような一種の未来像は、現状を踏まえた上で、構築していくこともできよう。

4) 以上「人間論」については、その問題の領域は多岐に亙る。そしてどんな問題であっても、それを取り上げることは可能である。ここでは自分の専門の関係上、哲学的な方面の問題にしぼったが、それが他の学問領域においても、その学問固有の仕方で、問題追求は可能であると思われる。ただし、学生が、人間のもっている問題性をただ体験から意識することは非常に難しいことであると思う。それは筆者の独りよがりと言われるかもしれないが、目下、様々なことを体験途上の学生には、その体験を深めるためにも、他者の経験による刺激を必要としている。それがわれわれの場合には、先人の残した言語による資料である。誰かある人が体験して、それを内省した結果である言語表現は、後に来る者にとって、またとない格好の拠り所となると思う。ただその宝ともいえる資料をどのように学生に提示し、その大切さを理解してもらうかが、何処までも残る問題であり、教師の力量と熱意にまつことであろう。

註

- (1) プラトン、『プロタゴラス』352C-D. またプラトンの「知る」ということについては、たとえば、こうも言われる。「知る者は、ものを知ることによって、絶えず自己自身を変化させている」。田中美知太郎著、『哲学初歩』、岩波書店、1977年、29頁。
- (2) エマヌエル・レヴィナス、『全体性と無限』参照。
- (3) 宮沢賢治、『農民芸術概論綱要』、筑摩版新修宮沢賢治全集第15巻、8頁。
- (4) ミハイル・バフチン、『ドストエフスキエの詩学』、望月哲男・鈴木淳一訳、ちくま学芸文庫、1997年、57頁。
- (5) 山本巍（宮本久雄、大貫隆共著）、『聖書の言語を超えて』、東京大学出版界、1997年、35-36頁。

授業で用いた文献

- ヨゼフ・ピーパー、『愛について』（稲垣良典訳）、エンデルレ書店、1981年。
- トマス・アクィナス、『神学大全』（山田晶訳）、中央公論社、
- アウグスティヌス、『魂の偉大』、アウグスティヌス著作集2、教文館、1979年。
- 今道友信、『愛』（ブリタニカ）
- 森有正、『いかに生きるか』、講談社現代新書、1976年
- 木村敏、『人と人との間』、弘文堂、1972年
- ソポクレス、『オイディプス王』（高津春繁訳）、筑摩書房（世界文學大系2）、1959年
- 夏目漱石、『こころ』、漱石全集第12巻、岩波書店、1979年
- 森鷗外、『舞姫』、鷗外選集第1巻、岩波書店、1978年
- 三浦綾子、『塩狩峠』
- ドストエフスキー、『罪と罰』（工藤情一郎訳）、『白痴』（木村浩訳）、新潮文庫版。
- 宮沢賢治、『銀河鉄道の夜』（ちくま文庫、宮沢賢治全集7）
- Plato, Phaido, translated by R. Hackforth, Cambridge, 1972.
- Descartes, Meditations, in A Modern Introduction to Philosophy, Readings from Classical and Contemporary Sources, ed. Paul Edwards and Arthur Pap, New York, 1973.
- Pascal, Pensees, translated by John Warrington, Everyman's Library (870), 1967.